

女性の政治参画

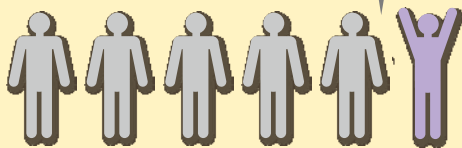
女性は政治に向いてない？



日本で初となる女性の総理大臣が2025年に誕生しました。女性が圧倒的に少ない政治分野において、大きな前進といえるでしょう。

その一方で、衆議院議員の女性比率は15.7%と、世界182か国中140位、OECD諸国でワースト2位です。^{※1}国民の代表である議員に女性が少ないと、女性の声が反映されにくくなってしまいます。

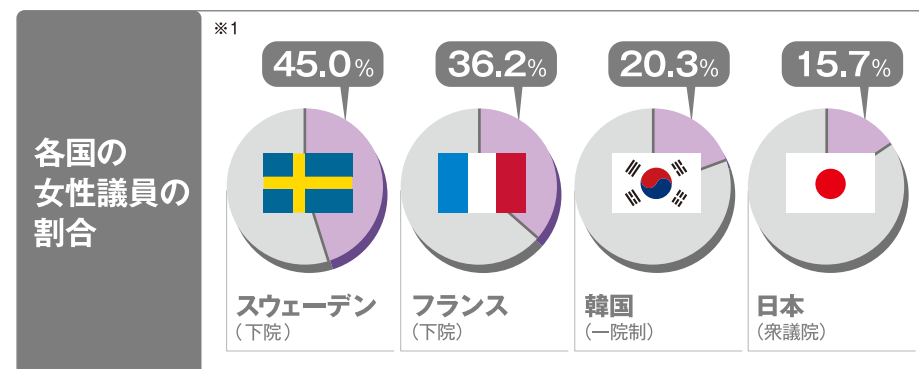
衆議院議員の女性比率は約6人に1人



「ガラスの天井」という言葉があります。男性と同じように能力や実績があっても、女性が一定の地位以上につくことができない障壁のことです。重要な意思決定の場に女性が参画できない状況や、「リーダーは男性」という思い込みなどがガラスの天井を作っています。女性のリーダーが誕生した今、ガラスの天井を突破できたといえるかもしれません。しかし、女性が総理になったからといって、必ずしもジェンダー平等が達成されるわけではありません。男女格差や女性の生きづらさが解消される政策をいかに実行していくかが重要です。

女性の政治参画が進んでいる国では、多くの場合クォータ制を取り入れています。**クォータ制は**、格差をなくすために性別などを基準にして、議席や候補者の一定数を割り当てる制度です。2020年にはクォータ制を導入している国と地域は約60%になりました。^{※2}

日本では2018年に候補者均等法（政治分野における男女共同参画の推進に関する法律）が施行されましたが、数値目標は努力義務となっていてペナルティはありません。2021年の改正では、セクシュアル・ハラスメントやマタニティ・ハラスメント等の防止措置が追加されました。



地方議会での女性の割合は、都道府県議会議員で14.6%、市区町村議会では18.1%です。女性議員が一人もいない議会もあります。^{※3}

ガラスの天井だけではなく、子育てと政治活動の両立、立候補者や議員へのセクシュアル・ハラスメントなど課題は多くあります。

女性議員が増えることで、男性中心の制度や慣習が変わり、ジェンダー平等な社会へ向かうことが期待されます。

出典

※1 IPU（列国議会同盟）2025年8月時点

※2「諸外国における政治分野の男女共同参画のための取組」〔内閣府男女共同参画局〕

※3「地方公共団体の議会の議員及び長の所属党派別人員調」〔総務省〕
令和6年12月31日現在